

CONTENTS

- =====
 ■ 巻頭言 「満洲国と日本占領地の文学研究における新資料
 ——『華文大阪毎日』復刻版と『梅娘文集』」
 ■ 追悼・坂元ひろ子先生 学生の位置から振り返る坂元先生
 ■ 会務年度変更後初めての役員体制をふり返って
 ■ 特集：第73回全国学術大会報告
 ■ 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書
 =====

■ 巻頭言

満洲国と日本占領地の文学研究における新資料
 ——『華文大阪毎日』復刻版と『梅娘文集』

羽田朝子（秋田大学）

満洲国や日本占領地文学の研究は戦後長らく注目されてこなかったが、1980年代以降の近現代文学史の捉え直しのなかで再評価が進んだ。近年では占領下の中国知識人の選択を「抵抗」と「協力」の二項対立で捉えるのではなく、多種多様で流動的な文化的選択がありえることを前提に、彼らの文学活動の複雑性や多面性が検討されている。そうしたなか、当該分野において重要な新資料が二点、相次いで出版された。この場を借りて、諸賢に紹介したい。

一つ目は、岡田英樹監修『華文大阪毎日』復刻版（全18巻、2022年5月～24年1月、不二出版）である。『華文大阪毎日』（以下、『華毎』）は大阪毎日新聞社・東京日日新聞社による大型総合雑誌で、日中戦争のさなかの1938年11月から45年5月にかけて発行された。満洲国や日本占領下の中国大陸で発売され、誌面の前半では日本の国策を宣伝・啓蒙する記事が掲載されたが、後半の三分の一ほどが文藝欄に割かれていた。そのため既成作家の流出によって荒廃が進んでいた当該地域の文壇において安定した作品発表の場となり、とりわけ若手の中国人作家が多く集まることとなった。

『華毎』文藝欄では当初、満洲国と華北の作家の作品が数多く掲載され、誌上における両地域の文壇の融合が進んだ。その後南京で汪精衛政権が発足すると、華中在住の作家の作品も掲載されるようになった。結果的に『華毎』は、満洲国・華北・華中といった日本の支配により分断されていた地域をつなぎ、占領下に一つの文化圏を形成したのである。これにより、中国人作家たちは自らの才能を発揮する場を確保するとともに、地域を超えて繋がることが可能になった。

『華毎』の一部は「民国中文期刊数字資源庫」、「抗日战争与近代中日関係文献数拠平台」、「全国報刊索引」といったデータベースでも閲覧できる。しかし創刊から停刊まで最も網羅している復刻

版の通読には、他に代えがたい利点がある。ページを繰っていくことで、個々の作品に着目しただけでは気づかなかったことが見えてくるからだ。以下、筆者が研究対象としている女性作家・梅娘（1916～2013）を例に紹介しよう。

梅娘は満洲国で文学活動を始めたが、夫の柳龍光が『華毎』文藝欄の編集を担当することになったため、1939年に来日し、『華毎』編集部のある大阪の近郊（兵庫県西宮市）に居住した。その代表作である長編小説「蟹」を書き上げたのは、この日本滞在中のことである。1941年に梅娘は日本占領下の北京に移るが、その直後の同年9月から『華毎』で「蟹」が連載され（～12月）、注目を浴びることになる。このように満洲国や日本占領地を流動する作家は、『華毎』により一貫した活動の場を得たのだ。

『華毎』の通読により発見したのは、「蟹」が連載時、張資平（1893～1959）の長編小説「新紅A字」と同時掲載されたことである。張資平は1920年代から上海で活躍した大作家であるが、『華毎』誌面のレイアウトや編集後記の内容から判断するに、編集部もこの「南の大作家と北の新進女性作家」の同時連載に意義を見だし、力を入れていたようだ。当時、張資平は汪精衛政権の農礦部で官職に就き、しかも農礦部の職員だった劉敏君という女性と不倫関係を結んだことから、中国社会から大きな批判を浴びていた。「新紅A字」の主人公も張資平自身と劉敏君をモデルにしており、汪政権下の南京を舞台に、政府機関に勤務する作家と若く美しい女性との愛情と破滅が描かれたものだった。こうした二重のスクランダルの中にある「話題作」と同時連載されたことにより、梅娘の「蟹」も相当に注目を浴びたことが窺える。

二つ目の新資料は、上述の梅娘の作品をひろく網羅した張泉主編『梅娘文集』（全十冊、上海三聯書店、2023年7月）である。満洲国や占領地文学の再評価のなか、1990年代から梅娘の作品集は複数出版されているが、なかでも『梅娘文集』は最も広範に作品を集めている。小説や散文、翻訳のほか、劇本、児童文学、連環画、未発表作品、書信が収録され、附録として張泉氏による解説と梅娘の年表や作品目録、研究目録が附されている。

『梅娘文集』の成果として注目したいのは、梅娘の処女小説集『小姐集』（益智書店、1936年）の収録作品を網羅していることだ。『小姐集』は梅娘が吉林省立女子師範学校在学時に、彼女の才能を見いだした教員の推薦を受けて出版されたものだが、これまで散佚したと見なされ、長らく「幻の本」であった。おそらくは主編の張泉氏が『小姐集』を入手し、今回収録にいたったものとみられる。

日本敗戦直後から1950年代後半までの梅娘作品を収録したことも大きな成果である。この時期の梅娘の動向については、その後まもなく梅娘が反右派闘争や文化大革命で批判にさらされたことにより、長らく詳細が不明であった。しかし近年の研究により、以下のことが判明している。日本敗戦直後、梅娘は夫の柳龍光が「漢奸」として制裁の対象になったことから故郷の長春に潜伏し、その間吉林で国民党系の雑誌『第一線』の編集に携わり、国民党の国家建設に参加した。中華人民共和国成立後は北京に戻り、1950年代後半にかけて上海の『亦報』や『新民報』晩刊、香港の『大公報』で小説や散文、童話を発表したほか、児童文学や連環画の出版に携わった。『梅娘文集』はこうした最新の成果を反映させ、この時期の作品についても網羅的に収録している。

このように『梅娘文集』により梅娘作品の全貌が明らかになったことで、その長い文学活動を通覧し、その変遷や連続性を検討することが可能になった。これにより梅娘研究のさらなる進展が見込まれる。

『華毎』や『梅娘文集』のような重要な資料が、今まで整理や出版がかなわなかったのは、ひとえに政治的な理由によるだろう。満洲国や日本占領地の文学の再評価が進んだとはいえ、日本のプロパガンダの性質をもつ『華毎』や、親日的な一面や中国共産党が構築する歴史観と相容れない面も有する梅娘とその作品は、政治的にデリケートな存在であり続けた。さらに最近では、中国大陸において当該分野の自由な研究活動が難しい状況にあると伝え聞いている。そのため、これらの資料を活用していかに研究を進展させ、研究発展の場を守っていくかは、中国国外の研究者にかかっているといえよう。日本と関わるテーマということもあり、私たち日本の研究者の責務は大きい。

■追悼・坂元ひろ子先生 学生の位置から振り返る坂元先生

吉川次郎（中京大学）

昨年（2023年）10月30日、一橋大学名誉教授の坂元ひろ子先生がご病気のため、逝去された。私はここ数年来、共同研究の一員に加えていただいていた関係で、特に昨年に入って先生の体調がすぐれないことは主にメールを通じてうかがっていたものの、まさかこのように急に去ってしまわれるとは全く思いもよらず、訃報をうけてただ呆然とするのみだった。後日、一橋大学で先生のゼミ生であった鈴木航さん、森巧さんがお声がけくださり、先生の御自宅にお邪魔してご遺骨に向き合うことができたが、その折もどうにも実感がわかないままであった。年を跨いだいまなお、心のどこかでその事実の確認作業をしている感覚を取り去ることができない。

坂元先生は中国近現代思想史を専門とされ、譚嗣同の思想研究を実質的な出発点に、章炳麟や熊十力、梁漱溟、李叔同など中国の近現代を彩った思想のかたちを明らかにされた。また、それらの骨格をなす清末仏教（特に唯識）、新儒家哲学への深い論考はいうまでもなく、従来、扱いにくいものとされ、あるいは軽視されてきた中国の人種概念、ジェンダー、優生思想にも果敢に切り込まれた。それが可能であったのは、人文学における批判精神の必要性を常に意識しつつ、その前提として日本の近代が朝鮮や中国をはじめアジアにもたらした抑圧、その傷あとについての真摯な把握が先生のなかでなされていたからであろう。さらに近年では漫画・アートなどビジュアルにかかわるものも意欲的に取り上げながら、アジアという空間の内外で交錯するさまざまな問題群の分析にも取り組まれた。

こうした多岐にわたる広大な関心領域について、十全かつ適切に振り返るには、私はあまりに力不足である。そもそも、先生の活発な研究活動の蓄積や多方面におよぶ人間関係を前に、私は先生が東京都立大学にいらした短い5年間に教えを受けた学生の一人にすぎず（しかも期待に応えることのできなかつた学生である）、本当はこのような大切な追悼文を書く資格を満たしていないと自覚している。ただ、この小文が私という井戸から覗いた天の一部であることも確かであり、それが先生に関わった多くの方々の思い出と結び合わされて、多面的に描かれるべき坂元先生の広がりをおぼつかでも構成できればと願うものである。

1. 都立大時代のこと

坂元先生とはじめてお会いしたのは、1993年4月のことである。当時、都立大の学部の3年生であった私は、山口大学から転任されてきた先生の講義を履修するという、ごくありふれた状況で、

先生に接することとなった。大学という場を研究と教育の2つの側面から見た場合、坂元先生は圧倒的に「研究」重視であったと思うが、実際には教育についてもたいへん骨を折ってくださった。アヘン戦争の林則徐から淪陷区の周作人にいたる「中国思想史」の授業は実に3年がかりで、配られた講義レジュメのほとんどを手元に大切ににとってあるが、ここで中国近現代思想史の基礎的な流れを身につけることができた（いまでも覚えているのは、「蘇報案」の「案」が「事件」を意味することを教わったときのやりとりで、こうしたささやかな1コマがなぜ克明に頭に残るのか不思議である）。また、学部の際にすすめられた李沢厚『中国の文化心理構造—現代中国を解く鍵』（坂元先生と佐藤豊先生、砂山幸雄先生との共訳、平凡社、1989年）の内容も、中国文化へのアプローチの仕方として強く印象に残った。

一方、大学院に進んでからのゼミでは、調べ方や翻訳の精密さについて求められる水準が高く、緊張した空気のなかで参加することも少なくなかった。梁啓超の「飲氷室自由書」を読んでいた頃は原文が比較的平易であるためまだよかったものの、これが嚴復『天演論』に移るとかなり苦しくなった。テキストの選択には難易度の段階的な引き上げという教育的な企図もあったと思われるが、ゼミでの『天演論』の読解は、先生が一橋大に移られた後も引き継がれる長いプロジェクトとなった。そこでも私は一部参加させていただいたが、中途から参加した院生にとっては、さらに難渋を極めたのではないだろうか。

特に大学院での指導においては、いまの基準からいえば厳しすぎる面もあったかもしれない。ただ、そこで鍛えられたのは確かであり、その厳しさは先生の指導教員としての責任感に裏打ちされていたことも疑い得ない。また、なぜか都立大時代の坂元ゼミには先生や私も含めて大阪・関西出身者が多かったせいか、なんとなく談笑のうちに雰囲気緩和されることも多かった。都立大・一橋大をつうじて定期的にひらかれたゼミの風物詩の餃子パーティーなども忘れ難い思い出である。

大学院時代に非常な感銘をうけたものに、『思想』849号（1995年3月）に掲載された「中国民族主義の神話—進化論・人種観・博覧会事件」があり、これは後に記念碑的な単行本『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』（岩波書店、2004年）の基調テーマとなった。

2. 著作の出版をつうじた「教育」

中国の近現代思想史へのジェンダー視点の導入について、先生はその根本的な欠落を埋めようと特に心を砕かれた。たとえば、『連鎖する中国近代の“知”』（研文出版、2009年）の内容は、基本的に初期の思想史研究をベースにしたものだったが、論考それ自体がいかにも精密で完成度が高くても、「補論」のかたちで思想家たちのジェンダー意識を問題にしないわけにはいかなかった。誤解をおそれずにいえば、この分野における男性中心・女性不在の「安定」をあえてゆるがし、これからの中国思想史研究に欠かすことのできない構えを示されたのである。思えば先生の人生の歩みとほぼ重なる日本現代中国学会の歴史において、最初の女性の理事長（2003～2004年）となられたことは、もちろんそこに単純なジェンダーの観点を持ち込むことはできないかもしれないが、一方でそれは明確な突破として私の中ではこの著作に教えられたことと二重映しになっている。この『連鎖する中国近代の“知”』の出版にあたっては校正チェックのお手伝いをさせていただいたが、はるか以前、先生がまだ都立大にいらした頃、同書に収録される旧稿のデータ化のアルバイトをしたことがあった。ところが、当時のOCRは性能がきわめて低く、特に難解な熊十力論の部分は文字化けによってほとんど暗号文となり、全く使い物にならなかった。このことは後にも先生との思い出話

のなかで、研究環境の技術的進歩を振り返る文脈で何度も話題になり、大いに笑いあったものである。

2010年より翌年にかけて刊行された『新編原典中国近代思想史』全7巻（岩波書店）は、坂元先生が編集委員に加わられた大規模な企画であったが、いわゆる『旧編』（『原典中国近代思想史』全6冊、岩波書店、1977年）の編者が先生の師である西順蔵先生だったこともあり、おそらく特別な思いを持って臨まれた仕事であった。先生は第4巻『世界大戦と国民形成—五四新文化運動』の責任編集を務められたが、名だたる先生方のなかで明らかに力不足であった私を編集協力者として加えてくださったのも、実は広い意味での「教育」の一環であっただろう。なお、『新編』の企画全体のなかで、先生がジェンダー視点からの思想史資料を積極的にくりこむことを主張され、各巻に一定程度結実したことは特筆すべきことと思う。また、そのつながりから、村田雄二郎先生が責任編集をされた第3巻『民族と国家—辛亥革命』において、かつて院生時代に学んだ「湖南同郷会による大阪博覧会人類館台湾女性事件の調査」の翻訳をさせていただけたのも、ひととき感慨深い。

ほかに私が校正のお手伝いをしたものに、岩波新書の『中国近代の思想文化史』（岩波書店、2016年）がある。世にさまざまな新書があふれるなかで、これほどの情報量を盛り込んだものは少なく、各事項のチェックに苦心した記憶がある一方、先の『新編』のときと同様に、ここでも多くのことを学ばせていただいた。ジェンダーへの目配りはいよいよ充実するとともに、日本の戦争責任、天皇制の問題（校正段階での対話を経て若干修正されたが、故宮と皇居との対比にも表れている）など、先生をつらぬいていた批判精神のあり方をさまざまな局面で感じ取ることができた。

3. 遺された仕事—厳復『天演論』の出版

2017年から坂元先生が中心となって、厳復『天演論』を読み解き最終的に日本語訳を完成させる共同研究が行われてきた（科研「厳復の西洋体験と『天演論』のテキスト形成ならびに清末における受容過程の研究」）。参加メンバーは、学習院大学の高柳信夫先生・小野泰教先生、ソウル大学の梁一模先生、中央大学の原正人さん（修士課程以来の坂元ゼミ同期生）と私である。この共同研究は私にとってはまさに先生のゼミの延長であり、再現でもあった。そのため、純然たる研究の場であるにもかかわらず、定期的に関われる研究会では学生・院生時代のなつかしさ（と厳しさ）がよみがえる思いもした。特に夏に青木湖と蓼科で行われた2度の研究合宿では、数日間にわたり朝から缶詰めになってテキストと格闘する一方、夜には持ち込んだビールを片手に先生を囲んでさまざまなことを語り合い、本当に楽しいものであった。

コロナ禍の到来とともに、研究会もオンライン中心に移行してやや味気ないものとなったが、それでも部分的に面接による会合も復活させながら歩みを進め、2023年8月には最終原稿がまとめられて、いよいよ出版というかたちでのゴールが見えてきた。そんななかで、坂元先生は帰らぬ人となられたのである。体調不良について述べられた9月半ばのメールには、「今となっては『天演論』出版までなんとかこぎつきたいと祈るばかりです」とあったが、かなしいことにその祈りは先生の生前には聞き届けられなかった。

11月の初めに先生の御自宅を訪問させていただいた際に、テーブルに置かれていたクリアケースをご遺族のご厚意でもらいうけることができた。そこには、山のような付箋とともに、読み込まれてばらばらとなり、いくつものクリップで分割された『天演論』が入っていた。かつて坂元先生は、亡くなられた西順蔵先生の志を引き継ぐかたちで、譚嗣同の『仁学』の翻訳を『仁学—清末の

社会変革論』(岩波書店、1989年)として仕上げられた。いま遺された『天演論』の仕事は、共訳者である高柳先生のもとで着実に進められている。私もまた、かつて学生であった一人として、その完成のために微力をつくしていきたいと思う。

■会務年度変更後はじめての役員体制をふり返って

家永真幸 (東京女子大学)

2022年4月から事務局長を務めさせていただき、この3月で2年間の任期満了を迎えます。会員みなさんにはご迷惑やご不便をおかけすることも多々あったかと思いますが、これまでのお力添えに心より感謝申し上げます。あとは5月の総会(オンライン)の準備を粛々と進め、新執行部へのスムーズな引継ぎに努めたいと思います。

前期(2021年度)に会務年度の「10月はじまり」から「4月はじまり」への変更が行われ、今期(2022-23年度)は4月にはじまる最初の役員体制でした。会計年度、会務年度はすでに3月末締めに移行しましたが、学術大会は10月開催前提で数回先まで開催校に依頼済みであったため、総会および全国理事会は今のところ5月にオンライン開催とする移行措置を続けています。2024年度の法政大学大会は10月開催ですが、2025年度の東海部会が幹事となる大会から5月に開催することが内定しているため、それ以降は「学術大会、総会、全国理事会」が同日かつ対面開催に復旧できる見通しです。

このように会務年度変更改革はまだ移行期の段階にあるわけですが、今後最大の課題となるのは、会誌『現代中国』の発行時期を変更すべきか否かという問題です。現在の会誌発行時期は、かつての年度末である9月頃に設定されています。このままでは、ある号の編集作業まっただ中の4月(実質的には5月の第1回全国理事会)に、編集委員長(常任理事)が交代しなければなりません。ところが、会誌発行時期を4~5月頃に移行するには、原稿募集や査読のスケジュール調整など、クリアしなければならない現実的な問題が色々あることが分かっています。移行するにしても、調整にもうしばらく時間をかける必要がありそうです。

なお、昨年10月頃に『現代中国』をお送りする際、翌24年度の会費振込用紙を同封させていただきました。これは郵送経費節約および、業務委託先の中国研究所の作業軽減の観点から実施されたものでしたが、私がぼんやりしていたことから、依頼状や説明がないまま封入され、会員みなさんへのメールでのご依頼・説明も会誌発送からしばらく経った後になってしまいました。この点、ご迷惑をおかけした会員各位にお詫び申し上げるとともに、事務局長が編集委員会、中国研究所、会計担当理事との連絡を密にして、この分かりにくい状態を解消するよう次期執行部に申し送りしたいと思います。

これに関連して、本学会は会計・会務年度の変更にともない、みなさんにお支払いいただいた会費を半年分「先食い」している状態になりました。この点についてはすでに総会でお認めいただいたとおりですが、今期理事会では会員全体の利益になる形で還元する観点から、①『現代中国』のオンライン公開を推進し、DOI(Digital Object Identifier)を取得することおよび、②学会公式ウェブサイトをリニューアルすることなどに使っていくという方針を、前期理事会より申し送られておりました。

このうち①については、澤田ゆかり編集委員長および編集委員会各位のお力添えにより投稿規程および査読規程を改訂していただいた甲斐あって、J-STAGE への『現代中国』掲載の申請が認められ、学会のお財布を痛めずに DOI を取得することができました。申請にあたっては丸川知雄理事から懇切丁寧なご助言もいただきました。各論文をアップロードする際にやや面倒なデータ打ち込み作業が発生するため、今期も細々と公開作業を進めていますが、次期は是非担当理事職を新設してアルバイト学生を組織するなどして公開を加速してもらえればと思っています。②については私の力不足で今期のうちに成果を上げることができず、中途半端な形で次期に引き継いでいただくことになります。

なお、DOI 取得に費用がかからなかったことや、ウェブサイトのリニューアルが進んでいないこととともに、本学会の現在の財務状況は一見すると余裕がありそうに見えます。しかし、会員数の減少とともに今後の増収は期待できませんので、引き続き節度ある支出が重要であることに変わりありません。

以上でご紹介した様々な課題は、私が事務局長を引き継いだときから存在していたにもかかわらず、私はその重要性に気づいていなかったり、解決策が思い浮かばないので見て見ぬふりをしたりして、今期のうちに道筋をつけられなかったものです。会員みなさんに心からお詫び申し上げるとともに、次期執行部の取り組みにぜひご協力・声援くださいますようお願い申し上げます。

私は2年前の今ごろ、それまで本学会での業務担当理事の経験がなく、常任理事会に出席したこともない状態で、突然の依頼に戸惑いながら事務局長をお引き受けしました。本来やるべきことを十分に進められず、申し訳なく思っている点を数えればきりがありませんが、多くの方のお力添えのおかげで何とかここまでやってこられました。将来事務局長を頼まれそうな若手会員に向けて取上げて申し上げると、この仕事はそれなりに時間を取られますが、黒子役として学会組織の動き方を学ぶことができたのは非常に面白い経験でした。何かが起これば必ず誰かが助けてくれましたし、傍からは妙な組織だと思っていたこの学会のよい所も見えてきました。

事務局長に限らず、学会の業務を担当すると、その学会への愛着が多少なりとも湧くものです。そう考えると、本学会の将来のためには、いつも同じメンバーで業務を担当するのではなく、様々な会員に関わってもらえるサイクルを作っていくのが重要に思えます。次期執行部には是非、「断りやすく、引き受けやすい」雰囲気を作っていただければありがたいと思います。また、会員各位におかれましては、次期執行部からお仕事のご依頼があった場合には、是非前向きにご検討いただけますよう、私からもお願い申し上げます。

■特集：第73回全国学術大会報告

2023年10月14日、15日の2日間にわたり、神戸大学にて第73回全国学術大会が開催されました。共通論題、各部会・分科会の責任者より総括をいただきましたので、特集として掲載いたします。

【共通論題】「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」

2023年全国大会の共通論題は、久々の完全対面式ということもあり、100人を超える参加者が集まってくださった。今回のテーマは「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」としたが、共通論題でジェンダーを扱うのも初めてのことだったという。

以下、各報告と質疑応答の内容について簡単に報告する。

・星野幸代(名古屋大学)「踊る女性へのまなざし—革命バレエ表象におけるエロティックな欲望」
米国在住の巖歌苓の小説『芳華』『白蛇』を中心に提起、活字が描く革命バレエ／舞踊と、現実に革命期に作られた舞踊シーン、そして男性の映像作家(馮小剛)が文革期の記憶を辿りながら作り上げた舞踊練習シーンを比較しながら、書き手／作り手の身体に寄せる視線にどのような違いがあるかについての詳細な解説があった。文革期の舞踊については、林白『たった一人の戦争』に比較の余地があることも提案された。

・小笠原淳(熊本学園大学)「文学テキストにおける中国女性の肖像—描く身体と描かれる身体」
民国期に生きた蕭紅、文革時の知識青年だった史鉄生、70後の余秀華という三人の書き手による身体表象を比較。病弱な体と独立を求める精神の間で揺らいでいた蕭紅、清末から新中国までの政権交代を見届けた纏足の祖母に、障害者としての自分を重ね合わせた史鉄生、脳性麻痺自分の体を見つめながら SNS で生命について発信しつづけている余秀華。いずれも「弱く」「欠損」した立場から身体性を強く意識したテキストを完成させている。

・大橋史恵(お茶の水女子大学)「植民地期香港における中国系家事労働者の移動と生存—「ケア」と「クィア」の交差に注目して—」

外国人家事労働者が主流化する以前の香港のケア労働に注目し、大陸出身女性の家事労働者の多くが高齢化していくときに何が起きているのかを明らかにしたもの。ケア労働がグローバルに繋がっていく様子を詳細に追いながら、香港を終の住処とした家事労働者の女性たちがいかに連帯し、蓄財しようとするダイナミズムを解説した。

・鈴木賢(明治大学)「中台における「性別」規範の変容」

2019年に同性婚が合法化され、台湾の性別意識は大きく変わった。本報告は、同性婚合法化までの経緯を振り返り、2004年に性別平等教育法が制定されて以降の台湾の歩み、性別意識の革新と対中国政策との関係、なお残る伝宗接代への圧力などについて丁寧に解説したのち、閉塞感が募る中国の状況についても行き届いた説明がなされた。

討論者は三須祐介(立命館大学)と石川照子(大妻女子大学)がつとめ、主に文学的視点と歴史的視点に立脚しつつ、四報告全体をカバーし、フロアへの討論へつながる建設的なコメントがなされた。

質疑応答時間にも活発な議論は続いた。以下 slido に残っているものを記しておく。星野報告へ：見られる客体としての男性舞踊手をどう考えるか。巖歌苓がクィアな関係を描きつつヒロインがみな異性婚を選んでいるのをどう考えればいいのか。小笠原報告へ：弱い蕭紅が強い蕭軍に依存していただけではなく、蕭軍もまた「強い男性」であるために蕭紅の依存を必要としていたのではないか。大橋報告へ：大陸の家事労働者は性的な誘惑や呪術的な脅威にどう対応したのか。香港の中国系家事労働者に自梳女はどの程度の割合を占めていたのか。鈴木報告へ：ゲイの国民党支持者という存在をどのように考えればいいのか。白先勇『孽子』の大陸での受容状況について。

会議のあとは懇親会があり、多くの参加者がそのまま懇親会に参加して熱っぽい議論の続きをしていた。素晴らしい報告者、討論者、そしてオーディエンスに恵まれて意義のある討論を展開できたことに感謝したい。〔記：濱田麻矢〕

【自由論題① 経済・社会】(参加者：28名)

第1報告「開業一年半を経た中国ラオス鉄道の現状と債務問題」(慶応義塾大学(名)・大西広)

は中国の「一帯一路」建設の中で、インドシナ半島を縦貫する鉄道建設として注目されるが、同時にスリランカのハンバントタ港と並ぶ「債務の罠」ではないかとの懸念も多くある中国ラオス鉄道の現状について、関係する政府関係者への聞き取り、全線および周辺地域への詳細な見分、データを駆使してその現状と課題を評価するものであった。結論として、①予定通りに開通し、コロナがあったものの営業成績は非常に良好。料金、移動時間とも優位にあり、旅客、貨物とも順調に成長し、列車はほぼ満員状態。中国からラオスへの観光客数も激増し、国外からの旅行者の1/4が中国人が占める。②しかし、ラオスの通貨 KIP の対ドルレートが半分にまで下落したことから返済に関しては不安。③とはいえ、「意図した債務外交」とは言えない、④ハンバントタとは異なり、所有者は中国ラオス合弁企業であり、経営権の約3/4は中国側。質問としては、今後は高速道路に重点移行するのではないか、という質問があった。

第2報告「中国におけるPM2.5問題を巡る市民の主体的な認知過程に関する実証研究—メディア報道とリスク認知の関連から読み解く」(大阪大学・許俊卿)は中国のリスクガバナンスに関する研究として、PM2.5を対象とし市民のリスク認知におけるメディアの役割に焦点を当てた研究を行うものであった。分析モデルとしては情報収集行動を独立変数、リスク認知を従属変数、主観的知識量を媒介変数、情報源への信頼と報道効果への評価を調整変数として、北京市・天津市・河北省を中心に実施したアンケートとインタビューのデータ分析が行われた。結論として、PM2.5問題の緩和に伴い関心度は下がり情報収集行動も低調になるが、問題の再燃に伴い、新たな情報収集行動が始まり、情報源も変わっていったが、政府や市民は異なるリスク認知を持ち、お互いに理解しあってもいない面があり、今後は「共考」の必要があるというものであった。質問としては情報統制が厳しく、民主主義国家でもない中国において西側諸国と同水準の政府と市民のコミュニケーションは成り立つのか、また、それが成り立つことを前提とした理論的フレームワークを用いることはできるのか、中国市民のこのようなリスク認知過程は具体的にはどのような問題を引き起こしているのか、リスクマネジメント論として、従属変数はリスク認知ではなく、リスクのヘッジとカバーの行動にすべきではないのか、といった質問がなされた。

第3報告「中国の県域都市部における施設による高齢者介護サービス—吉林省の公主嶺市と舒蘭市の事例を中心に」(立命館大学(院)・任泰然)は中国の高齢者介護サービスを全国的に展開するうえで焦点となっている周辺中小都市(「県域都市部」)における高齢者介護施設のサービスの現状を、吉林省公主嶺市と舒蘭市のアンケート調査をもとに明らかにするものであった。県域都市部は地級市の中心である市轄区と比べ経済水準に劣るが高齢化率は高い傾向にある。したがって、高齢者介護サービスの展開には困難が多いことが予想される。しかし、公主嶺市・舒蘭市においては高齢者100人当たりベッド数で全国平均も吉林省平均も上回り、施設も比較的新しくて機能も高い。ただし、介護度の高い失能・半失能高齢者の比率は比較的低く、医療サービスとの連携も不十分である。職員数の少なさから入浴介助など手間のかかるサービスは展開しにくい。なぜこのようになっているかを解くカギは県域都市部においては市轄区よりも建設費用が低いため料金を低く設定できるために、市轄区からも県域農村部からも比較的介護度が低い高齢者を中心に「縦ライン」での入居が行われているということである。質問としては都市中心部で働く子供世代が親の介護をどのように行うのかという視点を入れると、料金も低くて距離も近い施設を選択する理由がはっきりするのではないか、家族のトータルな満足度という視点が必要なのではないか、という質問がなされた。〔記：中川涼司〕

【自由論題② 文学・宗教】

本セッションは、文学2本、宗教1本の計3本の報告があった。そのうち、座長1（松浦恆雄）が文学2本を担当した。

文学一本目は、高尚（神戸大学・院）「乱世の恋と治世の恋—張愛玲「傾城の恋」から施叔青「憐細怨」へ—」。本報告は、まず先行研究によりながら「憐細怨」における張愛玲の影響を確認したあと、この二人の作家が恋愛物語を通してどのような香港を描いたのかを明らかにしようとした。特に施叔青の初期作品に見える香港像を取りあげた点に報告者の独自性が見える意欲的な報告であった。

文学二本目は、田中雄大（東京大学・院）「施蛰存の詩学—情緒の発露としての新詩理解から『現代』詩の肯定へ—」。本報告は、施蛰存の詩学を「情緒」と「肌理」というキーワードから明らかにしようとした。特に「肌理」という語の持つ当時の文脈を明らかにしつつその詩論における役割を分析する挑戦的な報告であった。

両報告に対して、会場から幾つもの、報告者の検討に値する有益なコメントが出された。一本目については、「スージー・ウォンの世界」（映画）との関係を考察する必要性、二本目については、施蛰存の詞曲への造詣の深さを考慮する必要性が指摘されるなど、活発な意見交換が行われた。

出席者は、39名。やや小ぶりの会場であったこともあり、ぎっしり詰まった会場は熱気に満ちていた。〔記：松浦恆雄〕

本分科会の後半は「宗教」として、佐藤千歳（北海商科大学）が「2000年代以降の中国社会における宗教実践の広がり—非制度的宗教および非公認宗教の視点から—」というテーマで報告した。現代中国における宗教状況（宗教人口、宗教政策）と「宗教概念」を踏まえて、「非公認宗教や、国家が『宗教』と認めない宗教実践も視野に入れると、現代中国の長期的な宗教復興や政教関係の特色をどのように描くことができるのか？」という問いがなされた。続いて、現代中国における「宗教」概念の特性と、公認宗教制度の枠組みを踏まえ、宗教状況を4象限の図で捉え、それぞれについて調査にもとづく分析を行った。その結果、公認された制度宗教以外の非公認宗教や非制度的宗教の興隆により、長期的な宗教復興がもたらされたことが示唆された。さらに、伝統文化の振興を政策とする習近平政権においても、「宗教／迷信」の区別が国家による宗教概念の外縁を形成する宗教観は継承されていたと指摘された。具体的な実態に関する質問も含めて、現代中国の複雑な宗教状況に対する理解を深めることができた（参加者：約25名）。〔記：石川照子〕

【自由論題③ 歴史】（参加者：28名）

外交史研究・法学研究の観点からの歴史研究の報告と討論が行われた。

団陽子会員（日本学術振興会特別研究員 PD、東京大学）による「対日戦後処理「中間賠償」と米華関係についての再考」、横山雄大会員（東京大学・大学院）による「1970年代末から1980年代前半にかけての中国漁船の日本近海進出」、石塚迅会員（山梨大学）による「中国と法治について対話ができた頃—湖南省の行政（法）改革2007—2011—」の3本の報告が行われた。

団報告は、中華民国の対日賠償請求について、米国の対日占領政策の転換により、思惑通りに進展せず挫折したという先行研究の認識について再考するものである。米国については、当初日本に対し懲罰的であったということはなく、また、占領下日本の経済維持を指向していたことから、

賠償方針に「転換」はなかったとした。さらに、戦後当初より日本の国内資産に対する中華民国の賠償請求は思惑通りに進んでいないので、「挫折」についても解釈の余地があるとした。これらの結論を 1946 年から 1947 年にかけての中間賠償のための中間指令を中華民国が提案してから発出されるまでの過程の検討を通じて導き出した。報告は、日本国内資産に関してではあるが、在外資産の処理についても質問があった。

横山報告は、対象とする時期に関しては、現在の領土問題を念頭に尖閣との関係のみから議論するのは適切ではなく、上海市海洋漁業公司も中国政府も外交問題化することを避けようとしていたとして、漁業紛争は、ノルマ達成をはかる中国漁船によるものとした。当時の中国の遠洋漁業のあり方（国営公司下でのノルマ設定）や日本漁業の状況（とくに「日本漁業の覇権は失われていく」という「おわりに」の文言について）について質問があった。また、ウマヅラハギ漁についても質問があり、生鮮・加工食品の双方に用いられるとのことであった。

石塚報告は、中国における「法治」は、基本的には 1997 年以來今日に至るまで、中国的な「法治」であるが、対象とする時期においては西欧的「法治」への接近も存在し、それを示すものの一例が「湖南省行政手続規定」であるとし、また、その時期に湖南省を担った人々が仕掛け人となったという特殊な状況によるものであるとした。なお、当初の題目副題は「中国湖南省の」となっていたが、当日口頭で「湖南省の」と改められた。手続規定違反の行政行為の不服申し立てや訴訟での争い方や「規範的文書」の定義についての質問があった。〔記：高見澤磨〕

【自由論題④ 文化】

報告者は劉娟（横浜国立大学）、方園園（神戸外国語大学・院）、沈思遠（神戸大学・院）の三名である。

劉娟報告「中国の絵本市場形成前における日本の絵本観の受容——『幼児読物研究』を中心に」は、主に 2000 年代以降の中国における翻訳絵本の発展について考察するものであった。特に、松居直の絵本観の受容、および『幼児読物研究』に見える児童文学理論に着目しながら、「翻訳絵本」カテゴリの登場と隆盛について分析を進めた。

フロアからは、報告者の既出研究成果との相違点のほか、雑誌『小朋友』と絵本との関係性、少年宮の実態、絵本と情操教育の関係性について質問があった。

方報告「木版画から漆芸へ——沈福文の転身に関する歴史的検証」は、先行研究や一次資料に基づきながら、沈福文の転身の理由を考察するものである。木版画であれ漆芸（工芸美術）であれ、美術史の周縁に置かれる一方で、まだまだ再評価の余地ある魅力的な分野である。こうした中で、方報告は、沈福文を全面的に日本で紹介する意欲的な試みであり、今後の研究の可能性を垣間見せるものであった。

本報告については、沈福文の木版画の独自性を掘り下げるべきだという指摘のほか、沈福文の生まれ故郷である福建省と漆業との関係性について、木版画から漆芸への転身と「中華工藝社」といかなる関係性にあったのか、などの疑問が提出された。

沈報告「現代中国における出稼ぎ女性家事労働者の移動と生活——安徽省出身の A さんのライフヒストリーを例にして」は、都市化の進む中国において、家事労働者がいかなる労働実態にあるのか、文献・資料収集、インタビュー調査、参加観察などで通じて分析・考察を進めた。家事労働者はすでに都市部の家庭において欠かせない存在になりつつある一方で、その実態についてはほとん

ど分かっていない。本報告では、一労働者を総合的な角度から検討することで、中国における労働実態についてリアルな状況を伝えている。

本報告に対しては、労働者の職探しのネットワークについて、労働契約の問題、労働者団体の存在と役割についてなどの質問があった。さらに、より大きな世界的な動きの中で、今回の発表の内容を結び付けるともっと魅力的になる、というアドバイスもあった。〔記：城山拓也〕

沈思遠氏の報告「現代中国における出稼ぎ女性家事労働者の移動と生活」は、農村出身家事労働者 A さんのライフヒストリーから、現代中国の社会経済構造の変動がミクロな女性主体に与える影響を描き出した。

A さんは 1968 年に安徽省 S 県に生まれ、改革・開放路線のなかで青年期を迎えた女性である。地元の縫製工場等で働くことはあっても村を離れることはなかったが、2010 年代になって家事労働者として都市で働くことを決意する。出稼ぎの動機は子どもの大学進学や結婚を支えるためであったが、A さん自身の都市への興味関心とも呼応していた。ただし将来の展望は都市生活にはなく、老後は農村に戻ると考えている。そのライフコースは、習近平政権が打ち出してきた新型城鎮化政策に適合するともいえる。

あらゆる経済関係は、その再生産を担保する労働力なしには成り立たない。中国の都市経済もまた、A さんのような農村出身家事労働者が、中間層世帯の家事、産後ケア、育児、介護などのアウトソーシングに応えることで成長を遂げてきた。沈報告は、そのような都市における再生産労働力の供給が、「新しい世界を見たい」という農村女性の主体的営為によって支えられてきたことを浮き彫りにした。

質疑応答では A さんという 1 人の女性の事例のみを扱うという研究方法の妥当性が問われたが、沈氏によれば A さん以外の安徽省農村出身女性についても聞き取りを進めているという。一方で、マクロな社会経済構造とミクロな主体のつながりの複雑性をどのように分析しうるかという大きな課題も提起された。今後の研究の進展に期待したい。〔記：大橋史恵〕

【分科会 建国初期の中国社会の再構築】（参加者：約 45 名）

近年、地方檔案館や UCLA 所蔵資料、各種の口述資料などを利用した中華人民共和国建国初期に関する研究が多く発表され、それに伴い、従来の研究の見直しが進むと同時に、社会史や心性史、宗教史など、分野的な広がりも見せている。本分科会は、そうした最新の研究動向の一端を紹介しつつ、広くコメント・批判を募ることで、研究のさらなる進展を期すべく、企画されたものである。

第一報告・鄭成（兵庫県立大学）「建国初期の思想統合への国民の受容について」は、中国共産党によって新たに持ち込まれた価値観やイデオロギーに、当時を生きた青年がどのように相対し、それをどのように「受容」していったかを、山東省出身の党青年幹部 W が 1953 年 4 月から 54 年 12 月までの期間に記した「日記」を用いて検討するものであった。鄭会員によれば、W は、党の指示に忠実で集団・国家の利益を常に優先する「模範的人間」とはときに乖離する感情を抱く自身の「不足点」への内省を繰り返す。当時の青年にとり共産党の理念の「受容」とは、提示された理想像と自分自身との間に存在する大きなギャップへの苦悩と葛藤の連続であったことを示唆する報告であった。

第二報告・河野正（国士舘大学）「1950 年代河北省における共産党の人材育成と『浸透』」は、建

国初期に共産党が直面した、能力的・階級的に適切な幹部人材の不足という大きな問題がどのように克服されていったのかを検討するものであった。河北省檔案館や UCLA が所蔵する多くの史料を用いて河野報告が論ずるところ、土地改革によって良い階級に区分された貧しい農民たちは往々にして、識字能力の欠如ゆえ幹部の職務を担いきれず、結果として地主・富農らが末端行政を牛耳る状況が継続した。しかし、農業集団化に伴う教育状況の改善により人材の供給源が拡大したことで、地主・富農らは次第に農村の権力から淘汰され、名実ともに共産党の基層政権が確立されたのだという。

第三報告、杜崎群傑（中央大学）「毛沢東の人民代表会議・人民代表大会観：暴力と民主・警戒と強調の狭間」は、1954年頃に人民代表会議制度から人民代表大会制度への転換が生じた背景とその意義について論じるものであった。報告によれば、制度転換は、反革命鎮圧運動と「五反」運動によって党外人士を統制下に置いたこと、および、朝鮮戦争と社会主義化開始により広く人民を動員する必要性が増したことを背景として進められた。言い換えれば、この転換は、毛沢東らにとってのこの疑似代議機関の役割が、党外人士を含む一部エリートからの支持、あるいは「確認型正統性」の調達から、全人民による政権と政策への追従、つまり「服従型正統性」の獲得に変化したことの反映であったという。

この三つの報告に対し、上野正弥会員（神戸市外国語大学）と周俊会員（同志社大学）により、青年Wの社会的位置付け、土地改革によって生産関係が変わったことの農村権力構造へのインパクト、および人民代表大会制度への転換におけるスターリンの影響等々につき疑問が呈されたほか、全体として共産党の統治が浸透したとのストーリーを強調しすぎて、その側面で生じていた種々の重要な事象が見落とされていないか、といったコメントもなされた。またフロアからも、日記を研究の素材にする際、社会学的な手法も参照すべき、階級区分の変異性に注意が払われるべき、人民代表会議を検討するなら中央の人民政治協商会議に言及があるべきではないか等、多くのアドバイスや質問が寄せられた。すべての質問・コメントは厳しくも生産的であり、建国初期に関する研究をさらに前進させる上で、多くの重要なヒントに満ちたセッションとなった。〔記：角崎信也〕

【自由論題⑤ ジェンダー】（参加者：38名）

本分科会はジェンダーのテーマのもと、以下の三名による報告が行われた。

第一報告・孫楚珮（神戸大学・院）『啼笑因縁』における俠女の造型についてでは、張恨水『啼笑因縁』における関秀姑像を取り上げ、伝統的な女性から男らしい俠女への変化からは「女」と「俠」を分離し、後者を男性の領分とする市民階級の意識が垣間見えると分析した。また「新」と「旧」の狭間の存在として描かれる女性像には、現代と伝統を融合させようとする作者の思想が反映されていると結論づけた。フロアからは「市民階級」とは具体的にどのような人々を指すのか、関秀姑が愛国志士へと転身する続編をどう捉えるのかなどの質問が出された。

第二報告・何憶鵠（三重大学）「「小資」の女性ジェンダー化に関する考察——1990年代「文」の領域における男性性のヘゲモニー闘争を背景として」で報告者は、2000年代初頭に社会現象を巻き起こした「小資」の持つ女性的イメージから問題提起をし、従来は男性性が付与される「文」「文人」について、主に1990年代の人文精神論や、王朔（1958～）の「文人らしくない」文人像、陳思和などが提起した新たな知識人像を考察することを通し、「文」の領域において新たな男性性が形成されたとした。これに対し、討論では「小資」は必ずしも女性イメージと結びつかないのでは

ないかといった意見や、現代中国における男性性をめぐる議論についても質疑応答がなされた。

第三報告・姜文浩（東京学芸大学・院）「「十七年」時期の革命映画に見る女性像——『中華女兒』と『不屈の人々』を中心に」で、映画『中華女兒』（1949）および『不屈の人々』（1965）の成立背景や内容を論じたうえで、国のために犠牲となり、革命イデオロギーの代弁者であったヒロインたちが、その英雄的行為の陰で性別が曖昧化され、男性の化身として描かれることの問題性を指摘した。フロアからは「十七年」時期の映画のなかでこの二作品が取り上げられた意味や、報告者の言う、描かれるべき女性の「本質」について質問、意見が交わされた。〔記：神谷まり子〕

■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書

- 岡野翔太著『二重読みされる中華民国—戦後日本を生きる華僑・台僑たちの「故郷」』大阪大学出版会
- 河野正著『村と権力—中華人民共和国初期，華北農村の村落再編』晃洋書房
- 笹川裕史著『中国戦時秩序の生成—戦争と社会変容 1930～50年代』汲古書院
- 鈴木隆弘著『近代中国の言論統制—中国国民党宣伝部の成立』晃洋書房
- 中村元哉編著『改革開放萌芽期の中国—ソ連観と東欧観から読み解く』晃洋書房
- 本野英一著『盗用から模造へ 1880—1931—中日英米商標権侵害紛争史』早稲田大学出版部

=====

日本現代中国学会事務局
〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18
一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局
TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039
EMAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984
広報委員長：石塚迅（山梨大学）
ニューズレター編集：吉見崇（東京経済大学）
日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====